



第4号

# さらしなの里

「友の会」だより



2001・春



園児が丸太橋をわたる。先生が迎える

## 春を探しに堂の山へ

春は、杏、桜、林檎の花の蕾がだんだんとほころび、さらしなの里は一面花盛り。子どもたちと散歩に行き、花の美しさに、つい見とれてしまう。

更級保育園の子どもたちはとても幸せだ。春の園外保育に必ず行く山があり、その名が「堂の山」。冠着山が父なら、この山は子のような小さな山だ。

山道の入り口には沢があり、丸太橋がかかっている。小さな子どもたちがわたるのには至難の技だ。

おそるおそる四つ足で進む子。カニのように横歩きする子。それぞれ工夫してわたる眼差しは、真剣そのものだ。わたり終えると急な坂道が続くが、子どもたちの表情は、生き生きして元気に登っていく。

山頂に着いた時の笑みは、とてもさわやかで、喜びを全身で現している。木々がたくさんあり、木登りしたり、実を拾ったりと、遊びを十分満喫できる場所。更級の自然の中でたくさん遊びを体験することで、自然の美しさを感じ、心豊かに育つことを願いたい。

(更級保育園長・平林千代子)

# 縄文まつりはヒマワリ

毎年十月の最終日曜日に繰り広げられる縄文まつり。その魅力とその教育的意義は重なっている。二十一世紀を迎えた現在、どんなに科学が、文明が進歩し、生活

が便利になろうとも、人間の生活の

原型が

このま

つりの

中にある。

八回

目とな

った昨

年は、

全校あ

げての

参加と

なった。特に「豊穰儀礼」に五、六年

生全員がかかわり、まつりの開催を

盛り上げた。



これまでのように、縄文人の生活の一端を味わうだけの受け身的な活動から、昨年新たに登場した縄文クッキーや縄文ハンバーグなどの調理も含め、各種体験コーナーの推進スタッフの一員として加えてもら

い、お手伝いできたことは貴重な体験となつた。

「生きる力」を育む「総合的な学習の時間」の実践

として、この

縄文まつり

への参加を

試みたわけであるが、ここには教室での勉強に加え、体験、地域の文化、またそこに暮らす人たちなど、まさしく総合的な学習のまとめの場になつていたと言つていい。

冠着山の麓に位置する郷土「さらしな」。

早春（三月十八日）の昼下がり、歴史資料館にワハハと楽しい笑いが響いた。

塚田哲男さん原作の民話「羽尾の米はうんまいよ」と「羽尾斜子の起こり」方言版。ここは明治か大正の世かと思まがうほど、まるで地をいく

村のおっしやんやおばさんたちをはじめスタッフが一丸となつて演じ懐かしさがあふれる朗読劇となつた

昔、冬はおこたで夏は野良で、古老の語る話に耳を傾ける子供らの姿があった。彼らはいつしか地域の文化や風習を悟り地域社会への繋がりと誇りを感じ

山に抱かれたさらしな自然や風土、人々の体内に刻

記憶：さらしなの民話が聞く人の心の中を旅する。

大切なものを置き去りにした現代社会の心の透き間にそっと染み込んで

明日への自由な創造性を息づかせていってほしい。

## 冬はおこたで夏は野良

## 宿る更級らしな

そこにはこのまつりが大きなヒマワリのように思える。さらしながそこに宿っている。縄文太鼓に合わせてのびやかに踊る一群も、太陽に向かって咲く大きなヒマワリの花のようであった。

私にはこのまつりが大きなヒマ

ワリのように思える。さらしながそ

こに宿っている。縄文太鼓に合わせてのび

やかに踊る一群も、太陽に向かって咲く大

きなヒマワリの花のようであった。

（前更級小学校長・関口文昭）



（荒井君江）



暮らしの中に声がしなくなった。

羽尾の松本与喜のさんから、若いころに  
覚えたという飴売りさんの唄を聞かせて  
もらって

そんな思  
いを強く  
している。

与喜のさんが覚えている飴売り唄は、若

宮からは  
じまって  
八幡まで  
旧更級村  
の部落の  
名前が全  
部盛り込  
まれてい  
るもので、  
終戦後、  
飴売りさ  
んが、こ  
れを歌い  
ながら客  
を集め、  
たぐり飴やのぼし飴を売って歩いていたそ  
うだ。

# いろいろなき声が聞こえたっけ

だじやれも効いた楽しい歌詞。メロディー  
というよりはリズムミカルな節がついていたら  
しい。太鼓も叩いて売り歩いていたという。

話も聞いていて、小さいころの音の風景をい  
ろいろ思い出した。

「トーフー トフツ」の豆腐屋さん、

√若くもなのに若宮と

となりの芝原でひと休み

むこうの小村が仙石か

いたずら子どもがガキ山と

びよんぴよん羽尾といく三島

須坂じゃ飲めない代を出せ

大池あぶない杉の木のぼり

峯へのぼって

世にも名だかい猿が馬場

すそ野にみえるは中原か

夏でもとけない郡村

八幡はちまんさして行く



松本与喜野さん

「ナアットトー ナットナットツ」の納  
豆売り…。  
ほかにもてんまりをつきながら唄を  
うたったっけ。この間、歴史資料館で民話  
の朗読劇で「羽尾斜子」の話をやったけど、

「斜子」ということばが入っている唄もあつ  
た。

√ひとごにふたご見渡す嫁は

いつきてみても斜子の帯を

八の字にしめて

この家に泊まった

ひいふうみいようー

## 飴売りさんに、てんまりに…

なぜか知らないけど、小学生  
のころラジオから聞こえてくる  
二葉百合子の浪曲を夜なし、  
ふとんにもぐってよく聞いてい  
た。貧乏で娯楽も少ない時代だ  
つたからそれも楽しみだったん  
だろう。  
聴きながら、なんだか悲しく  
なっちゃって、ふとんの中  
でよく泣いていた。かあちゃんに  
見られるのやだったから  
ね。

(野本洋子)

# おらほの冠着

④

中世になって仏教がさらしなの里に入ったとき、冠着山には真言宗の寺院が山の四囲に建てられていた。

徳治二年(一一三〇七)に明徳寺が僧真雅によって創られたというが、その場所は冠着

山中の「寺跡」と呼ばれる所であったと言われる。

都から北国に至る古い東山道の支道が通っていた古峠を少し下ったところ

で、「上の沢」のほとりがそこだ。馬頭観音のある「ワタクボ」の傍らである。

同じころ、坂井村の安養寺の前身が「坊平」に建てられたという。「坊平」は山頂南側すぐ下の小平地で、いまは登頂のための駐車場となっている高地である。

また上山田の智識寺は同じ山の東側の



「堂平」に開かれたという。これらの寺は庵のようなもので、後世、みな里に下り、いまの伽藍になっている。なぜ、はじめに山中に営ませたか。この山の神秘的な姿がそうさせたにちがいない。山全体が怪奇な形をし、随所に巨岩が散在し、また滝もあり、いかにも烈しい姿をしており、修行の場として誠に好適な所として選ばれたものだろう。

里に下つてはますます信仰の対象となり、今も山頂にある「注連張石」は明徳寺が石尊大権現として代々お祀りをしてきた。

この神のことは神奈川県の大山信仰で阿夫利(あふり)神とも称し、「雨降神」とも書かれて、降雨の利益があると言われる。冠着山は水を恵んでくれる神の山であり、日照りの時は山頂で火をたいて雨乞い祈願をした。石尊さんにはそんな思いも込められて祀られたものだろう。

(塚田哲男)

〔編集後記〕五月の初め、芽吹き始めた堂の山に行った。丸太橋をわたって坂を登って：までは小さいころの記憶と同じなのだが、お堂のある広場がなんだか息苦しい。

大人になったからそう思うだけではないようだ。周りの下草が生い茂り広場を侵食している。芝原から登って広場に至る口にある鳥居付近は笹に覆われほとんど歩けない。道祖神も埋没している。

松本与喜のさんが披露してくれた飴売りさんの唄には、さらしなの里の景色がよく盛り込まれていると思った。飴売りさんもさぞかし、この里で売り歩くのは楽しかったのではないだろうか。

話は変わって、イノシシを実際にとつつかめてみたいと思う。農作物を食い荒らし害獣扱いされることが多いが、縄文まつりでは神に奉納する神聖な生き物だし。(大谷善邦)

さらしなの里友の会事務局

T 389-0812

長野県埴科郡戸倉町羽尾二四七の一

さらしなの里歴史資料館内

電話026(276)7511

FAX026(261)4161